



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.56 (2017.3.31)



歌で繋がる国際交流授業

国際学部教授 岩井 千秋

♪ Whenever I am feeling low
I look around me and I know
There's a place that will stay within me
Wherever I may choose to go
I will always recall the city
Know every street and shore
Sail down the river which brings us life
Winding through my Singapore

♪ This is home, truly
Where I know I must be
Where my dreams wait for me
Where that river always flows
This is home, surely
As my senses tell me
This is where I won't be alone
For this is where I know it's home

目次：

歌で繋がる国際交流授業
国際学部 岩井千秋先生・・・ 1
国際学部 宇野昌樹先生、退任メッセージ・・・ 2
コミュニケーション能力と語学力
国際学部 武藤彩加先生・・・ 2
割れた慈愛と胸をはだけた憤怒
ジョット《美徳と悪徳の寓意像》
(パトヴァ・スクロヴェニ礼拝堂)
名誉教授・芸術資料館もと館長 大井健地先生・・・ 3
いちだい知のトライアスロン「英語多読マラソン」・・・ 4
後期 いちだい知のトライアスロン映画上映会・・・ 4
イベント報告 ほか・・・ 4

これはシンガポールの歌手 Kit Chan が歌う Home の歌詞です。青い海と水路に囲まれたアジアのハブ都市に自身のアイデンティティーを見出そうとする彼女の想いが強く伝わってきます。同じ Home でも、John Denver の Country Road (ハワイの歌手、故 Israel Kamakawiwo'ole (Iz) の替え歌も私は好きですが) とは明らかに風情が違いますし、ましてや日本の「ふるさと」や韓国の「고향의 봄 (故郷の春)」とも、言葉が織り成すイメージは別物です。始めて1年にも満たないウクレレを奏でながら、私はそんな言語と思考の関係を昨年の4月から講義(応用言語論)しています。この初老の挑戦を「国際舞台」で披露する日が来ようとは思ってもみませんでした。

その発端は、本学国際交流推進センターの松本センター長からのお誘いでした。年末の12月14日と年明けの1月11日に本学と交流のあるシンガポール国立大学と米国カリフォルニア州のセント・メアリーズ・カレッジから、学生さんがそれぞれ来校されるとのことで、本学学生との交流授業を依頼されたというわけです。授業の内容をご紹介すると、ざっとこんな感じです。

まずは、シンガポール国立大学。用意した曲は、日本からは「ふるさと」と「上を向いて歩こう」、シンガポールからは上の Home と Rasa Sayang の二曲。ちなみに Rasa Sayang はマレーシア、シンガポール、インドネシアなどで広く親しまれている曲と聞いていたのですが、“Rasa sayan eh, rasa sayang sayan eh” の反復メロディーの箇所以外は、皆さんあまりご存知ありませんでした。「上を向いて歩こう」のいわゆる Sukiyaki Song は、シンガポールの

若い人たちにはあまり知られていないこともこの授業で知りました。想定外でしたが、お一人の学生さんが趣味のハーモニカを持参されていて、即興でウクレレとハーモニカで「ふるさと」をコラボ演奏、両大学学生さんの美声も加わり、とても和やかな交流になりました。

セント・メアリーズ・カレッジとの交流では、まず私の3年生ゼミで取り組んだ英語によるプレゼン用の創作作品の発表を行い、続いて日本語と英語の歌を通じて交流をしました。選曲は、日本語が「上を向いて歩こう」と「さとうきび畑」、英語が Last Night I Had the Strangest Dream、Have You Ever Seen the Rain、そしてボブ・ディランの代表曲 Blowing in the Wind でした。この英語の3曲はゼミの創作作品(童話『ちいちゃんのかげおくり』を英訳し、オーラル・リーディングという音読の手法で発表)に取り入れたものです。この創作作品と「さとうきび畑」、そして英語の3曲に共通する平和のメッセ



シンガポール国立大学交流授業風景 (いちこも)

ジを読み取り、学生同士で英語でディスカッションをしてもらいました。もちろん討論だけでは面白くありませんから、お互いに歌の意味とメロディーを教えあって、ウクレレの演奏で合唱しました。

「歌は世につれ、世は歌につれ」とはよく言ったものですね。この交流授業を通じて、歌が内に秘める音調と言語的パワーの不思議を実感するとともに、国際交流のきっかけは難しい理屈よりも、人の体内に組み込まれた歌舞音曲を好む DNA に訴えるのもひとつの方法であることを痛感した次第です。お陰で、私自身、二回の授業を楽しく担当させていただきました。(ちなみに Kit Chan の Home は YouTube で視聴できます。)

宇野昌樹先生、退任メッセージ

国際学部の宇野昌樹先生は、平成14年度4月に広島市立大学に着任され、平成16年度から17年度まで語学センター運営委員会委員として、平成18年度から21年度まで語学センター長として語学センターと関わってこられました。3月31日でご退任になります。15年に渡る長い間、アラビア語やアラブ研究など、ご専門の中東・アラブ関連の授業を主に担当になっておられました。第二外国語の教育に多大な貢献をされた宇野先生に、ご自身の経験を振り返りながら、学生の皆さんへメッセージを書いていただきました。

第二外国語を学ぼうとしている、また現在学んでいる学生の皆さんへ「贈る言葉」

国際学部教授 宇野昌樹

僕は、大学でアラビア語を教え始めて29年、ここ広島市立大学で教え始めて15年が経とうとしています。僕がアラビア語を教えるようになったきっかけは、今内戦状態のシリアで約4年間アラビア語を学んだからです。ただ、アラビア語を教えることを夢見て学んだ訳ではありません。彼らシリア人を、そしてシリアという国が知りたくて、懸命に勉強しました。

実は、僕は英語が不得意で、中学や高校、そして大学でも進級ギリギリの成績で、「頭の悪い」生徒、学生の一人でした。なぜ「頭が悪かった」かと言えば、勉強をしなかったからです。なぜ勉強に身が入らなかったかと言えば、その最大の理由は英語を含め外国語を学ぶ意味が分からなかったからです。しかし、シリアへ行って始めて、英語やアラビア語といった外国語がどれほど大事なものか痛感しました。とは言え、英語の基礎が全くできていなかったのも、アラビア語を学ぶ際にも本当に苦労しました。どれほど苦労したかと言うと、髪が白くなり始めたこと、そして疲労が溜まって一週間寝込んだことです。そんな僕が、勉強を続けるために、今度はフランスへ渡り、ほぼ一からフランス語の勉強を始めるという無謀とも言える決

断をしました。

こんな無謀な行動に僕を駆り立てたものは何かと問えば、僕の中にいつも充満している好奇心ではないかと思っています。人は日常の中で、多くの人やもの事に遭遇します。そして、何故なんだろうと多くの疑問を感じながら生活しています。そんな中で感じた疑問を分かって、理解しようとして、人とコミュニケーションを取ったり、本を読んだりします。僕はこれまで、多くの人に出会い、いろいろなことに遭遇し、多くの疑問を感じ、少しでも理解したくて、また多くの人に会い、そして本を読んできました。そして思うことは、英語、アラビア語、フランス語をかじった程度だけれど、学んで良かったということです。

大学4年間、どうしたら人間として豊かになれるだろうか。外国語が嫌いだった僕から言うのも何だけど、外国語をしっかり学び、いろいろなジャンルの書物をたくさん読み、多くの人に出会うことかなと思います。



ミニコラム 外国語に想う【47】

国際学部准教授
武藤 彩加

コミュニケーション能力と語学力



子供が好きなあるお笑い番組の話です。一人のお笑い芸人が小学生レベル程度の英語力で、英語圏の路上で人に道を聞き、観光名所までたどり着くという挑戦をするコーナーがあります。人気のある番組なのできっと見たことがある人も多いでしょう。子供たちは彼の悪戦苦戦ぶりを笑いながら見ており、視聴者にもその「出来なさぶり」を笑ってもらおうという趣旨だとは思いますが、私は彼の繰り出すあの手に、ただ心からすごいと思ってみえています。

私は留学生に日本語を教える仕事をしています。初級から上級まで、これまで様々な国からの学生に出会ってきました。中でも、まさにゼロから、あいうえおの「あ」の書き方から始めて、半年間で初級レベルの日本語を集中的につめこむというコースを10年近く担当してきました。同じように月曜から金曜まで、朝から午後まで半年間ずっと日本語漬けという環境を経ても、人により結果はさまざま、半年間でよくここまでと驚くばかりの上達を見せる学生もいれば、そうでない学生もいます。母語の違いもあり、学習目標なども種々様々ではありますが、大まかに言って各学期の中ごろから終わり頃には、クラスは2つのタイプに分かれることに気づきました。ひとつは、拙いながらも留学生同士、日本語でコミュニケーションを取っているクラス、そしてもう一つは、最後まで授業外では英語のみであったという2つのタイプに割とはっきりとわかれるのです。

いわゆる筆記テストの結果などとは別に、これは私たち日本語教員にとってその学期の成果の一つの指標となります。日本語は多く複数の教員でチームを組んで教えていますが、学期の終わりに「今学期の学生は日本語で話していましたね」という結論になると、私たちは皆、とてもうれしい気持ちでその学期を終えることができるのです。

割れた慈愛と胸をはだけた憤怒

ジョット《美德と悪徳の寓意像》（パトヴァ・スクロヴェニ礼拝堂）

大井健地（名誉教授・芸術資料館もと館長）

そうか、これが“マタハラ”というやつなのだ。『失われた時を求めて』、400字詰原稿用紙1万枚の全篇にむらなく登場するフランソワーズは「私」の家の古い家政婦で、料理達人。ここでは自分の職域を侵させないために、あの下働き女性にどんどん買物や用事を言いつのる。あげくは大量のアスパラガスの皮筆りを命じる——その匂いで喘息発作を起こすはずだから。

マタニティーハラスメント。臨月に近い女中に情け容赦なく重労働を言いつけ、また産後には、病気状態の彼女に「あんなことをしなきゃ、こんなことにはならないのよ」と毒づき田舎の言い草を口にする。

犬のお尻も、惚れりゃあ

バラの花

「ジョットの『慈愛』はどうしてますか？」その下働き女性がジョットの絵に似ているとスワンは指摘する。

「私」はスワンからイタリアみやげに壁画の複製写真をもらい勉強部屋に飾っていたのだった。「感興は湧かなかった」というが、気の利いた感想は記している（挿図①②③を見てください）。『慈愛』①が自分の心臓を神のほうに差し出す仕草は、「まるで料理女が、地下の換気窓ごしに、ワインの栓抜きを一階の窓辺にいる人に渡している格好」だ。『慈愛』には慈愛がなく、『嫉妬』②といえば、まるで医学書の図版で、舌の腫瘍とか外科器具の挿入とかで声門や口蓋垂が圧迫された状態を示しているだけに思えた。

スクロヴェニ（別称・アリーナ）礼拝堂の腰板部にある単色の寓意像14面のうち、プルーストは言及していないが（参照本の「ラスキン全集第27巻」には図版不掲載だったのではないかと）、「憤怒」③が印象的。このポーズ、同じ堂内のキリスト磔刑を嘆く天使や、大祭司カヤパと同じで胸が張り裂けんばかり、なのである。僕は偶々発見したがブリュッセル《反逆天使の墜落》（1562年、ブリュッセル王立美術館）に描かれた妖怪蛙もこのポーズで、腹が割り裂けている。

『慈愛』は図で見るとおり全身がひび割れている。『失われた時を求めて』の完成とともに詳述されなかった登場人物に「ピュトヴュス夫人の小間使」なる女性がいる。顔に火傷した、そしてジョルジョーネ描くヴィーナスに似たとされるこの小間使と「私」は草稿段階では性関係を持つ。変態的、猟奇的な筋だだと僕は思うが、傷が欲望を亢進させているのである。ジョット寓意像を媒介に性的な想像魔性が旋回していると思える（参照：吉川一義『プルースト美術館』第二章）。

さてフランソワーズは、台所の小間使である妊婦の『慈愛』に冷酷だったが、女主人や職務には忠実だ。し

ばしばけだかいほどに「身の程、分限」を守って慎ましく廉直である。貴族の夫人や富裕ブルジョワ女性の数が圧倒的なこの小説で、性的思惑と無縁に、人格のある家事労働者として充実した生活をこなしている。彼女は農業国フランスの田舎育ちの良さ、根底において農民の土壌の豊かさを備えている。自然人にして働く者の、

権利と義務を譲らないのだ。だから全篇の登場人物中、唯一例外的に年齢をとらない、＜時＞の流れのなかでいつまでもかわらない。

軍隊の行進を見てフランソワーズは言う。若者は命を大事にしない、戦争という悲惨なことになると死ぬのが怖くなるのか。若者はかわいそう、牧場の草みたいになぎ倒されるんだ。

最終巻「見出された時」でプルーストはユゴーの『静観詩集』（1856年）から娘の死をうたう詩句を引いている。すなわち、

草は生え、子供たちは死なねばならぬ。

忘却の草でなく、永遠の生命ある芸術作品という豊かな草々は、現世の人びとが死んでこそうっそうと生い茂る。事物は永遠にやりなおされる創造によるのみ存在する、とプルーストは記す。



①『慈愛』



②『嫉妬』



③『憤怒』

新規開催

いちだい知のトライアスロン「英語多読マラソン」

今年度、新たないちだい知のトライアスロンの企画として、「英語多読マラソン」を開催しました。「英語多読マラソン」の目的は、図書館に配架されている英語多読用ペーパーバックを楽しみながらたくさん読むことです。参加者は記録用紙に本のタイトル、読み始め日、読み終わり日、ワード数を記録し、作品のあらすじを「いちだい知のトライアスロン web システム」で「感想レポート」として提出します。今回は4名が参加し、23件の「感想レポート」が提出されました。

●説明会

日時：12月22日（木）12：30～12：55

場所：図書館1階多読本コーナー前

●終了式

日時：2月7日（火）12：40～12：50

場所：図書館1階多読本コーナー前

●英語多読マラソン実施期間

12月22日（木）～1月31日（火）



Extensive Reading
in English



終了式では、渡辺語学センター長より参加賞が手渡されました



2016年度後期 いちだい知のトライアスロン映画上映会開催



テーマ Movies from comic books



12月5日（月）～12月9日（金）に、語学センターにて、いちだい知のトライアスロン映画上映会を開催しました。国際学部のゴーマン・マイケル先生にご協力いただき、国際学部の専門科目「言語・コミュニケーション研究入門」との連携企画で行いました。今回はコミックブックを基に映画化された作品を中心に7本の作品を日替わりで上映しました。期間中、何度も足を運んでくれる学生もおり、盛況のうちに終わりました。来年度も上映会の開催を予定しております。詳細が決まり次第、掲示やHPでご紹介いたします。ぜひご参加ください。

テーマ：Movies from comic books

上映映画：「X-MEN: ファースト・ジェネレーション」「スパイダーマン」
「キック・アス」「ロード・トゥ・パーディション」
「メン・イン・ブラック」「バットマン ビギンズ」

*番外編：「いまを生きる」

（国際学部専門科目「言語・コミュニケーション研究入門」で使用）

◆今回上記の作品を見逃した方は、図書館で視聴することができます。



イベント報告

● 韓国・慶北国立大学の体験授業

1月16日（月）～1月20日（金）、韓国大邱広域市の慶北国立大学の学生20名と引率教員1名が本学を訪問し、語学センター教室で、16日には国際学部武藤彩加先生の日本語学・日本語教育学II、20日には広島平和研究所孫賢鎮先生の授業に参加しました。武藤先生の授業では日本語のプレゼンテーションがありました。



体験授業の様子

● アフリック・アフリカ大学巡回写真展

12月6日（火）～22日（木）、第3回語学センターギャラリー展示として、国際学部目黒紀夫先生主催の「アフリカン・ブリコラージュ！」展を開催しました。

アフリカのブリコラージュ（器用仕事）と題されたこの写真展は、アフリカの人々が限られた物で工夫を凝らして創り出した様々な道具やおもちゃなどを、人々の表情と共に見ることができ、好評を博しました。



アフリカの人々のアイデア溢れる手仕事

視察・オープンキャンパス等報告

3月13日 University of the Fraser Valley（職員2名）、3月24日 西南大学（教員3名）

発行日	2017年3月31日	Phone	(082)830-1509
発行	広島市立大学語学センター 〒731-3194 広島市安佐南区大塚東3-4-1	Fax	(082)830-1794
編集	堀本真由美、加藤美奈（内線：6410）	E-mail	lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp
		ホームページ	http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html